

タイトル	中国「怪獣文化」の研究：現代メディアの中で増殖する異形の動物たち
著者	中根，研一
引用	北海学園大学学園論集，141：91-121
発行日	2009-09-25

中国「怪獣文化」の研究

—— 現代メディアの中で増殖する異形の動物たち ——

中 根 研 一

「怪獣」報道と中国人

かつて日本では「怪獣」と呼ばれ¹、現在では「未確認動物(生物)」²、あるいは和製英語の「UMA (Unidentified Mysterious Animals)」³と呼称されている存在がある。いわゆるネス湖のネッシーやヒマラヤの雪男など、未発見の謎の生物のことである。特に日本では、1970年代以降ブームとなり、ツチノコやクッシー、イッシー、ヒバゴンなどの騒動が起こっては消えていった。海外では、それらを未発見の動物と見なし研究する Criptozoology (隠棲動物学) なるジャンルを立ち上げ、主に動物学の観点から研究している学者もいるが、多くは UFO や幽霊などと同じく、まともな研究対象にはならず、オカルトの範疇で語られることの方が一般的である。

しかし近年、日本では民俗学の中の妖怪研究の流れから新たに幻獣学を提唱し、上記の未確認動物を含む「日本における謎の生物の伝承」を文化史的に概観しようという動き⁴や、科学史の中における未確認動物学について検証しようとする動き⁵などが盛んであり、従来はなかった様々な角度からの学際的な研究が始められつつある状況である。

一方、現在の中国でも、いわゆる「未確認動物」と呼ぶべき存在である〈野人〉(後述)や〈水怪〉⁶の「目撃談」がまことしやかに語られている。

では、中国ではこのような「未確認動物」たちをどのように呼んできたのだろうか。総称とし



『光明日報』1980年10月9日掲載、雷加「天池怪獸目撃記」。

て、統一されたものがあるわけではないが、1970年代の〈野人〉騒動当初には「奇異動物(奇異動物)」などの表記がよく見られた⁶。それが湖などの水の中に現れれば〈水怪〉と呼び、特に1980年に長白山の天池に現れたとされるものには「奇異動物」のほかに「天池怪獸」の呼称が与えられ、定着した⁷。また最近では「怪獸」の二文字でこれらを紹介する書籍も現れてきている。日本と同様⁸、このような異形の動物に対しては、中国でも「怪獸(怪兽)」という単語が使用されている。

ところが、実はこの「怪獸」という二文字は、単語としては中国の一般的な辞書には、通常、掲載されていない。37万語以上を載せ、中国最大の熟語辞典と言われる羅竹風主編『漢語大詞典』(12巻本、漢語大詞典出版社、1986-94)ですら、「怪獸」を収録していないのだ。「怪物」が一般的によく使われ、ほとんどの辞書に載せているのと実に対照的である。これはどういうことであろうか？

中国において「怪獸」の二文字は、古代の地理書『山海経』⁹の中にすでに使用例を見ることができる。たとえば以下のような記述がある。

また東へ三百八十里、猿翼の山というところ、そこには怪獸が多く、水には怪魚が多く、白玉が多く、マムシが多く、怪蛇が多く、怪木が多く、山に登ることができない¹⁰。

(「南山経」)

「怪」という文字は、「獸」「魚」「蛇」「木」に充てられており、これらはすべて、「通常ではない」「奇怪な」動植物という意味で使用されていると考えられる。そのため、「怪獸」の二文字に関しても、それは熟した一単語というよりも、あくまで「怪しい」「けもの」という意味を表しているに過ぎないのかもしれない。

さて、「怪獸」という単語の問題に関しては本稿の最後で改めて考察するとして、まずはこのような異形の動物たちが、近代以降の中国において、どのような「場」で伝えられてきたのかを見ていくことにしよう。

異形の動物の記録は様々な媒体に「実話」としても記録されてきた。清末には、上海で絵入り新聞『点石斎画報』¹¹が創刊され、大衆向けの時事報道や娯楽情報を載せて広く人気を博すが、そこには国内外の様々な奇聞も多く載せており、中には謎の怪獸の出現を迫力あるイラスト入りで紹介するものもあった。次ページの図版は同紙に掲載された「水怪、人と格闘す(水怪博人)」の記事である。ある夜、川の中から出現した「魚頭人身」の「水怪」が、人間と格闘した事件を伝えている。

この他にも、バラエティ豊かな怪獸たちのオンパレード¹²だが、そこで描かれる怪獸の形象の多くは、上述した『山海経』などに付された妖怪・怪獸画(イラストは明・清代に描かれたもの¹³)からの引用である。たとえば、刑場に現れた首なし妖怪や、海に漂う人面魚身の怪獸には、『山海



清末の絵入り新聞『点石齋画報』掲載の「水怪，人と格闘す（水怪搏人）」を伝える記事。光緒22年4月6日掲載。

経』に見える刑天^{けいてん}、陵魚^{りょうぎょ}の形象が与えられている¹⁴。時代は下り、20世紀の〈野人〉騒動（後述）の際にも、やはりその形象と物語に『山海経』をはじめとする古代の記述にそのルーツを求め、「未知」のものを「既知」の存在に置き換えようとする傾向が顕著だった¹⁵が、ここにも同じ心性が働いていたのは明らかである。「未知の怪獣＝未確認動物」に対する中国人の態度を考える上で、実に興味深い事実である。

いずれにせよ、大人も子供も視覚的に楽しめて、かつわかりやすい画報という、当時庶民の人気を集めた媒体で、頻繁に怪獣報道がされていたということは記憶にとどめておきたい。

筆者はこれまで、現代中国で語られる怪獣の物語、特に神農架の〈野人〉や、長白山の「天池怪獣」に代表される〈水怪〉について、現地での取材調査と文献資料の分析から、その文化的・文学的背景を探り、中国人の中に脈々と受け継がれてきた異形イメージの現代的展開を考察してきた。そこで明らかになったのは、1970年代の文化大革命末期の混乱の中で、政治的な思惑から蘇らされた伝承中の怪獣の姿であり、やがて1990年代末には商業主義の中で再生産され、観光資源として消費されていくキャラクターとしての怪獣の姿であった。

特に中国で人気があるのはこの〈野人〉型と〈水怪〉型の怪獣で、後述するように中国の国营放送である中央電視台（CCTV）も、このふたつのテーマで、それぞれ複数回の特集番組を組んでいる。

本稿では、このような20世紀末～21世紀はじめの中国メディアにおける怪獣表象の問題について概観し、筆者がこれまでの論考では取り上げきれなかった「現代中国の怪獣をめぐる様々な事象」を考察していきたい。

なお、このようなテーマを扱うにあたって用語の使用には慎重にならなくてはならないが、本稿では便宜上、実在する既知の動物にはない特徴を持つ異形の（もしくは未知の）生物の総称として怪獣を用い、特にその用語自体が重要な問題となる場合や、中国語の原文でも同じ「怪獣（怪兽）」が使用されている場合は括弧付きの「怪獣」として表記することにする。

「〈雑交野人〉騒動」と1990年代の中国メディア

まずは現代中国で一番有名となった怪獣から、話を始めたい。人煙まれな湖北省の原生林地帯・神農架に人とも獣ともつかない謎の怪獣〈野人〉の目撃が相次ぐのは1970年代。具体的には、1974年5月1日に地元農民が〈野人〉と格闘をしたというニュースが、現地の地区宣伝部長・李建によって中央に報告されたことに端を発する。現代中国に怪獣の物語が「実話」として立ち上がった瞬間である。その後、1976年以降、中国科学院が国の威信をかけた調査隊を現地に送り込み、多くの目撃証言を採取したものの、やがて1980年代に入ると終息していった¹⁶。調査で得られた情報も含め、〈野人〉をめぐる「実話」には、古代より中国人に語られてきた山の妖怪の形象や、その物語の影響が色濃く反映されていることは、明らかであった¹⁷。

しかし、中国内外に広く宣伝されたこの騒動は、多くの人間のその後の人生に影響を与えていた。ある者はアマチュアの研究会¹⁸を立ち上げ、ある者は自ら〈野人〉になるが如く山中にこもり、またある者は〈野人〉を題材にしたSF小説や漫画、舞台劇などの創作を発表した¹⁹。

そして、1990年代末、〈野人〉は神農架観光開発の広告塔として担ぎ出され、再び世間の耳目を集めることになった²⁰。その時にメディアを騒がせたのは神農架の観光PRを意図して作られた映像集（ビデオCD）『神農架“野人”探奇』（武漢音像大学出版社、1997）に収録された「人間と〈野人〉のハーフ」という触れ込みの〈雑交野人〉である。しかし、これもまた伝統的な山の妖怪の伝説をモチーフとした物語²¹であり、商業主義に伝説の怪獣の物語が利用されるという、20世紀末の中国社会を象徴するような出来事であった²²。

以上のような、いわゆる〈野人〉騒動の内幕、およびその文学的・政治的背景については、すでにこれまで様々な角度から考察を試みてきたので、本稿では多くは触れない。今回、主に扱おうとしているのは、1997年の〈雑交野人〉報道当時の中国メディアの状況と、それ以降、21世紀に入ってから多様なメディアに出没するようになった、中国の怪獣文化についてである。

上述した1997年の〈雑交野人〉映像公開に端を発する一連の社会現象は、当時生まれたばかりの新しい映像メディア＝ビデオCD（以下VCD）の普及と無関係ではなかった。このVCDの登場は、中国人の余暇の楽しみとして、テレビの普及²³を上回る勢いで人々のライフスタイルを激変さ



VCD『神农架“野人”探奇』ジャケット写真。

せた。

1990年代に安価なデジタル映像記録メディアとして誕生したVCDは、低コストでの生産が可能なることから、主にアジア地域で流行を見せた。特に中国大陆で爆発的に広まったのは1997年前後で、たとえば、1997年末に発行された雑誌『新週刊』総31期号（広東省新聞出版社、1997）では、同年の「10大ヒット商品」「10代経済ニュース」のいずれにも、このVCDフィーバーをランクインさせている²⁴。VCDプレイヤーの都市部での普及率は、1997年のブーム開始時には百世帯当たり7.87台で、以降、1998年には16.02台、1999年には24.71台、2000年には37.53台、2001年には42.62台……というように、わずか数年の期間で急速に中国人家庭の中に浸透していった²⁵。

このヒットの要因はいくつかあるであろうが、ハードの普及初期段階における海賊版ソフトの氾濫といった事実も見逃せない。その性格上、正確な販売データは得られないものの、当時、定価の10分の1程度の廉価な海賊版は正規版よりもはるかに多く、道端やパソコンショップの店頭などに並べられ、誰でも簡単に手に入れることができた。カラオケ用の音楽ソフトはもちろん、ハリウッドや日本から合法／非合法を問わず輸入される映画やドラマの数々を、手軽に自宅のソファに座りながら、見たい時に見られるという状況が発生したのである。海外の物を含む多種多様な映像情報を「所有」し、「繰り返し」視聴できるという環境は、中国人にとっては実に画期的なことであった。

そのような状況下、神农架観光をPRする前述のVCDソフトは制作された。当時のフィーバーを考えれば、VCDというメディアを選んだことは、ごく自然なことであったといえる。そこには、それまで万人の目に触れることはなかったであろう1970～80年代の〈野人〉調査のドキュメントや、動く〈雑交野人〉のショッキングな映像が収められ、お茶の間に届けられたのである。

20年前の騒動を知る者も知らない者も、おそらくは初めて触れる〈野人〉の記録映像であったはずである²⁶。

この新しい映像メディアがもたらした衝撃は、これまた新たに急成長を始めた活字メディアが引き続き大きく取り上げることによってさらに増幅されていった。それはちょうどこの時期、1990年代半ばから登場し、グングンと部数を伸ばすようになってきた非党機関紙（商業紙）である²⁷。1997年10月7日、くだんの〈雑交野人〉報道第一報を載せたのが、他でもなくこの商業紙の草分けである二紙、四川の『華西都市报』と、広州の『羊城晚报』であった。その反響の大きさを受け、さらに踏み込んで真贋をめぐる追跡報道を大々的におこなったのもまた、四川の商業紙『成都商报』（1997年11月8日の記事等）であった。その後も、商業紙を主戦場にした報道合戦が繰り広げられたのである。

商業紙は市民生活に密着した記事が多く、カラー写真や広告も鮮やか、スポーツ面や芸能面も充実させて、消費者の興味を引きつけ、購買意欲をかき立てていた。そのような中に、時折、怪獣やUFOといった猟奇的・オカルト風味の記事が混じるようになったのである。これは、先に見た『点石斎画報』などの清末の絵入り新聞に描かれた奇聞の数々を彷彿とさせる。

ある面で、現代のオカルト情報の発信源のひとつとなっている中国の商業紙だが、これは欧米のタブロイド紙や、日本のスポーツ紙に同様の記事が載る状況に似ている。20世紀の大きな怪獣



『成都商报』1997年11月8日掲載の「〈雑交野人〉の真贋論争を伝える記事。紙面の上半分を割く大きな特集である。

騒動（未確認動物騒動）の裏には、常にタブロイド紙の存在があったと言ってよい²⁸。そしてやはり中国でも、同様のメディアの誕生とともに、「実話」としての怪獣物語のテキストが流布していくことになったというわけである。

とにかく、VCD が爆発的に庶民の家庭に普及し、スタンド売りの商業紙を購入して読むことが人々のライフスタイルのひとつとなっていた 1997 年の中国だからこそ、上述のような〈雑交野人〉の物語は人口に膾炙し、一大ムーブメントを起こすことが可能となった。これは、中国が未だ体験したことのない、新しい形の「怪獣騒動」であったと言える。

そして、この騒動は 1998 年末、〈野人〉発見に懸賞金をかける探検旅行を企画する旅行者が現れるまでにエスカレートし、経済特区の深圳市・深圳博物館において〈野人〉展覧会（実態は深圳の富裕層に神農架への投資を呼びかけるイベント）を大々的に開催するに至り、同展覧会が閉幕した翌日の 1999 年 1 月 14 日、中国共産党の機関誌『人民日報』紙上に、〈野人〉の存在を完全否定する記事が掲載されることとなった。

『人民日報』の記事は、著名な動物学・古生物学・生命学・生態学・歴史学の権威ある学者たちが、「神農架に野人はいない」とする声明を発表したことを伝え、商業主義で非科学的な言説を流布し、探検旅行を扇動することは、野生動物保護法に違反する行為だと断じている。中国政府としては、この記事を掲載することによって騒動を終結させたいという思惑があったと思われるが、その後、大々的に〈野人〉探索を謳ったツアーは鳴りを潜めたものの、同地を案内する旅行会社のサイトには必ず〈野人〉の文字が躍り、神農架は引き続きこれを観光資源のひとつとして利用しているのが現状である。そして、後述するように 21 世紀に入ってから、〈野人〉をはじめとする様々な怪獣の書籍・VCD・DVD が世に出ることになった。また、地方都市では〈野人〉を紹介する展示イベントなども引き続きおこなわれていたようだ²⁹。『人民日報』という、一番強大なはずの官製メディアの力をもってしても、一度庶民向けの新しいメディアの中で暴れ出した怪獣の勢いを止めることは、できなかったということになる。

あるいは反対に、お上に……いや、科学によって公認されなかったからこそ、庶民の間に根強い人気を獲得したということもできるだろう。未確認動物のような疑似科学が、多くの庶民を魅了する理由について、下坂英氏は「第一に『夢がある』ということである。第二に、権威的な科学や科学者への反発である」と説明している³⁰。だからこそ、中国においても、このような通俗性の強い非官製メディアで、怪獣の物語が好んで取り上げられているとも考えられる。

これは、『論語』において「子、怪力乱神について語らず」³¹と戒められながらも、古来より怪異の記録を連綿と記し続け、それを読み・語り継いできた中国人の心性を物語っているともいえるが、なるほど、庶民の中に潜む「科学では解明できない謎が残っていて欲しい、偉そうな学者連中をギャフンと言わせたい」という思いは万国共通なのかもしれない。

このように、1999 年の年頭には、官製メディア『人民日報』があえて〈野人〉を否定することで事態の幕引きをはかろうとしたわけであるが、しかし、数年後、今度は誰だろう、その官製の

メディアのひとつが、〈野人〉を好んで取り上げていくようになるのである。

国営放送のゴールデンタイムに現れた怪獣たち

2007年の時点で、中国の百世帯当たりのカラーテレビの普及率は、都市部が137.8台、農村部でも94.4台³²。ほぼすべての家庭にテレビがある時代になった。

そのような中、21世紀に入ってから、中国の科学番組で〈野人〉が扱われる機会が増えてきている。それは、ここ10年の間に、従来はあまりなかったようなエンタテインメント色の濃い科学調査番組が続々と誕生していったことを背景にしている。自然の謎や、歴史・地理のミステリーを題材に、科学的にアプローチしていくというスタイルの、いわば大衆向け知的娯楽番組なのだが、その中でも、前述の〈野人〉や、湖や川などに現れる〈水怪〉については人気があるようで、筆者が確認できたものだけでも、近年、以下に挙げる複数の番組の枠で怪獣番組が作られ、放送されている³³。

(1) 「発現之旅」(中央電視台1)

2002年放送開始。中国版ディスカバリーチャンネルの呼び声高い。毎週金曜23:25～。

・最近の主な怪獣特集

200?年「“野人”之謎」

(2) 「走遍中国」(中央電視台4)

毎日20:00～。再放送は翌日二回。中国の歴史・文化・地理・自然について毎回取り上げるドキュメンタリー。〈野人〉や〈水怪〉、雪男といった題材も好んでシリーズを組んでいる。

・最近の主な怪獣特集

2004年9月13～20日「中国神農架“野人”調査報告」

2008年4月21日「西藏野人之謎」

2008年12月25日「天池水怪之謎」

2009年5月13～14日「銅壁関野人追踪」

2009年5月30～31日「賽里木湖“水怪”調査」

(3) 「探索・発現」(中央電視台10)

2001年7月9日放送開始。歴史・地理・生物・文化をテーマにしたドキュメンタリー番組。毎日21:25～42分放送。翌日再放送。月～金は中央電視台4でも毎日放送。UFOや古代文明の秘密、ビッグバン、歴史上の人物の逸話紹介など。

・最近の主な怪獣特集

2002年秋放送「神農架野人」

(4) 「走近科学」（中央電視台 10）

1998 年 6 月 1 日放送開始。キャスターが映像の幕間に解説を加えるスタイル。毎日 20：30～，再放送は翌日，中央電視台 1 と 10 で二回ずつ。UFO や未確認動物の番組が充実。

・最近の主な怪獣特集

2006 年 1 月 14～21 日「中国水怪調査」

（14～16 日「天池怪獣」，17～19 日「カナス湖の水怪」，20～21 日「四川省獵塔湖の水怪」）

2006 年 11 月 14～15 日「金湖水怪之謎」

2007 年 4 月 30 日～5 月 5 日「神農架“野人”調査」

2008 年 1 月 3～10 日「元宝山野人調査」

2008 年 2 月 25～3 月 1 日「カナス推測」（カナス湖の水怪特集）

2008 年 10 月 27～29 日「左海湖水怪」

2008 年 4 月 21～26 日「神農架“野人”調査」

2009 年 6 月 29 日「調査暗河不明生物」

また，目立った怪獣の特集はないが，以下の番組も様々な不思議な事象を取り上げては，紹介している科学番組である。

(5) 「百科探秘」（中央電視台 10）

「百科探秘」は月～金 19：57～，日曜 17：30～，再放送は翌日二回。動物や人間の神秘，極地探検，拳法の秘術など，様々な事象を科学的に紹介する番組。

・主な怪獣特集 特になし。

上記の中央電視台 1 は総合チャンネル，4 は中国語国際放送，10 は科学教育チャンネルである。

ここに挙げた中央電視台の番組群は，その構成に多少の違いはあるものの，内容は似たり寄ったりである。たとえば〈野人〉について言えば，調査の歴史をたどり，目撃者や〈野人〉研究家へのインタビュー，現地取材等々といった基本フォーマットに沿った番組構成になっている。また，近年の〈野人〉番組に欠かせなくなっているのは，1997 年の〈野人〉フィーバーのきっかけにもなった，〈雑交野人〉（「猴娃」とも言う）映像の検証であり，その遺骨の科学調査の報告³⁴や，その親族への直接取材である。上述のように，「走近科学」と「発現之旅」が複数回，放送をしている。

いずれの番組も，そのコンセプトは，自然科学の見地からオカルトのような迷信の背後にある「・」を解明し，できるだけ客観的に事実を伝え，大衆を啓蒙しようとするものであるが，番組内の演出はいささか過剰なくらいに凝っている。

怪獣目撃者本人の出演による手の込んだ再現映像や、迫力あるCGによる怪獣映像の紹介、不気味なBGM、幻惑的な映像エフェクト、視聴者を煽るような大仰なナレーションで種明かしを引っ張る番組構成等々。どちらかといえば、純粋な科学番組というよりも、ワクワクドキドキを優先させた、より娯楽色強いバラエティ番組の趣さえ漂う³⁵。

そしてこれらはすべて、上述のように中国全土をカバーする中央電視台が、しかも、いわゆるゴールデンタイムの時間帯にお茶の間に届けているのである。また、そのほとんどの番組が翌日には(複数回)再放送されているから、視聴者の目に入る頻度は非常に高いといえよう。さらに、こうして中央電視台で作られた番組は、ドキュメント映像部分を再利用して地方のテレビ局で流用されることもあり³⁶、それをカウントすると、視聴者数はかなりの数にのぼると推察できる。

また、これらの番組のいくつかは間を置かずにDVD・VCDソフト化され、一般に販売もされている³⁷ほか、「走近科学」や「発現之旅」、「探索・発現」などは、それぞれテーマごとに書籍シリーズ化され、〈野人〉や〈水怪〉の巻も発売されている³⁸。その番組の影響は、もはやテレビという媒体を飛び出している。

そして昨今、無視できないのがウェブサイト上での番組閲覧という視聴スタイルである。上述の番組のほとんどは(放送時期が古いものを除き)、中央電視台のサイトがストリーミング放送を提供している。つまり、テレビ番組を見逃しても、インターネットに接続できる環境さえあれば、



「探索・発現」の〈野人〉特集を編集し、DVDソフト化したもの(2004年発売)。

好きな時間に好きなだけ、番組を無料で楽しめるのである。その気になれば、ダウンロードした映像を私有化することが可能なのだ。同番組の映像のみならず、ナレーションや司会者の話した内容についても、ウェブを検索すればすぐにテキストを入手できる。

本物の怪獣は発見困難でも、怪獣を扱った番組は、中国では比較的容易に見つけられる時代になったといえよう。

雨後のタケノコのように怪獣調査番組が現れ、テレビやウェブなど、複数のメディアを通じて目にする機会が多くなりすぎたことを端的に示す事例がある。

中国の「百度知道」というサイトには、一般ユーザーの質問に別の一般ユーザーが答えるというコーナーがある。2008年4月、hh_0と名乗るある質問者が、「中央電視台の番組の名前についてお尋ねします」というタイトルで、次のように書き込んだ。

数年前に見たことのある中央電視台の番組で、探索や発見の話について語っていたのですが、「探索・発見」[という番組名]ではありません。その中の3つの話を覚えています。1、神農架の野人について語っていたもの、2、中国内のある川の水怪について語っていたもの、3、ある地方でたくさんの奇怪な人骨が発掘され、後に分析の結果、その地方で水害に遭ったか、それとも何か作ったかだったかということを語っていたもの……です。

これが何の番組だったか、お尋ねします！ でも「探索・発見」ではないのです³⁹。

自分の記憶の中の映像が、どの番組で放送されたものだったか、混乱しているというのである。するとこれに対し、すぐさま複数の回答のレス（レスポンス＝反応）が付き、多種多様な番組が挙がるという現象が見られた。「「走進[近]科学」だよ」、「走遍中国」でしょう」、「「百科探秘」では？」、「「発見之旅」です」と諸説乱れ飛ぶ状況は、それだけ近年の中国で同じような謎解き番組が百花繚乱で、頻繁に似たような怪獣探索ドキュメントを放送していることの傍証ともなろう。

いっこうに真相が判明しない中、比較的長文で回答したlobiyなる人物が、次のように答えている。

「探索・発見」ではないなら、「走進[近]科学」です。我が国の新疆のカナス湖というところのあの水怪の動画サイト[のURL]を、あなたにあげましょう。[筆者注：この後、当該サイトのURLが書き込まれているが中略]

その他の物については、私の手を煩わせる必要もないと思いますよ。あなたがその番組について知りさえすればね。[番組の]中の諸々の物はみな非常に人の興味を引きつけるものです。私もこの番組が好きです。

「探索・発見」という番組もよいですね、私はこれも好きです⁴⁰。

しかし、この回答について、質問者は質問の補足という形で、「「走進[近]科学」でもありません⁴¹」と書き込んだ。それに対し lobiy 氏はやや苛立ったようなレスを返している。

どうして「走進[近]科学」ではないなんてことがあるでしょう？ この番組であなたの言っているような内容についてやっていたのを、私は覚えていますよ。あなたはいったい何を求めているのですか？ あなたの言う「それとも何か」とかいうものって、何を言っているのですか？⁴²

結局、質問者はこの lobiy 氏の書き込みを最優秀回答とするのだが、最後までそれが本当は何の番組だったかはわからないままである。とは言え、複数の回答者が挙げたそれぞれの番組のすべてにおいて、前述のように、実際〈野人〉や〈水怪〉を扱っている以上、全員正解と言っていると思われる。

ところで、この質問者に対する回答の中で、ひとりだけこのような番組自体を批判する書き込みをした人物もいた。

いわゆる調査とやらはいい加減で、いわゆる結論とやらは非常に荒唐無稽だ。毎回いつも話を煙に巻いて、大衆を騒がし、撮ったモノはホラー映画みたいで、最後にはひとつのワケのわからない結論をひねり出すんだから⁴³。



2006年1月に「走近科学」で放送された「中国水怪調査」シリーズより、四川省獼塔湖の水怪の再現映像。CGを駆使した迫力ある仕上がりとなっている。

先述の通り、確かにこれらの番組は「科学調査」の看板を掲げながら、娯楽色を強く押し出し、結論部分もあえて謎や含みを残した終わり方をしていることが多い⁴⁴。番組の目的が純粹に科学による大衆の啓蒙であるならば、徹底的に怪獣など否定すればいいはずだが、ある意味、視聴者に夢とロマンを提供する面が強いのである。さらに言うと、これらはオカルト的なものを排除するのが（建前上だけでも）主眼であるはずだが、曖昧さを残す結論は、逆に視聴者をビリーバーに育ててしまう危険がおおいにあるだろう。番組で曲がりなりにも科学的調査をおこない、いくつかの仮説を立て、一定の結論を導き出しておきながら、そこに「まだ解明できない部分」を残すことは、科学者にとってはある意味正直かつ非常に真摯な態度とも言えるが、一方「やはり、超自然的な動物は実在する可能性はあるのだ」と考える視聴者を増やしかねないという点には注意をしておきたい⁴⁵。

インターネットが誘発した怪獣探し

インターネットに話が及んだところで、21世紀の怪獣探しとネットとの関係について、以下に少し触れておきたい。

中国におけるネットの普及率は2007年の時点で12.3%。上述の〈雑交野人〉騒動が起こった1997年時点では、その普及率はわずか0.1%であったから、その100倍以上に伸びている計算になる。ネット接続コンピューター数は、1997年には30万台であったものが、2007年6月には6710万台にも達している⁴⁶。

インターネットの即時性は、他のメディアではかなわない。10年以上前の〈雑交野人〉の時と比べ、情報伝達の量・スピードの両面で格段にアップし、また、文字や画像、映像の情報を広く共有し、それに対してある程度自由に意見を交換する場が設けられているという点でも、隔世の感がある。試みに、〈野人〉や〈水怪〉といったキーワードでウェブ検索すると、その存在に賛否両論あるものの怪獣談義に花を咲かせている掲示板等をたくさん目にすることができる。

そんな中、ひとつ興味深い現象があった。それは、特に中国に〈水怪〉騒動が多かった2005年⁴⁷の夏の事件だった。同年7月7日、天池を訪れた観光客が湖面を移動する黒い物体を発見し、ビデオカメラで撮影。映像は翌々日に地元テレビ局の電波に乗って、家庭に配信された⁴⁸。すると、その二週間後の7月21日に長白山国家自然保護区管理局のエンジニアが、天池で黒い物体が移動するのを20分にわたって目撃し、カメラで撮影した。同事件もすぐに各メディアがニュースとして配信した。第一報は29日にウェブ上のニュースサイト『新華網』で⁴⁹、30日以降、記事は他のウェブサイトや新聞各紙に引用され、写真とともにあつというまに広がっていった。

事態はここから、それまでの怪獣騒動にはなかった展開を見せる。

これらの報道を知って触発されたのか、やはり同月19日に天池を観光で訪れていた大学生が、後日その時撮影した写真を改めて調べたところ、湖面に正体不明の黒い点が写っているのを発見。その写真は8月1日の『新文化報』、およびウェブ上の『新文化網』に、記事とともに掲載された。

また、同様に7月26日に天池観光をした北京の男性は、その6日後(つまり上述のふたつの報道の直後の8月1日)、自分の撮った写真を整理していた際、偶然写り込んだ水面の黒い影を発見している。

一度、怪獣騒動をマスコミが報道すると、時間をさかのぼって別の目撃者たちが陸続と名乗り出るという現象は珍しくはない⁵⁰が、今回の二件はいずれのケースも、撮影時には怪獣の存在に気づかず、ネットのニュースなどで見たカラー写真に触発されて、既に撮った写真の中から怪獣を見つけ出そうという方向に向かったところが興味をひく⁵¹。山や湖へ直接行くのではなく、自分の手もとにあるアイテムを活用しての新しい怪獣探しである。

この一連の現象は、無論、昨今の中国の経済発展やデジタル機器の普及と無関係ではない。中国人の国内観光が盛んになり、かつては高級品だったデジタルカメラやビデオカメラも、簡単に持参できるようになったことが大きい⁵²。これまでなら、ただの目撃談だけで終わってしまっていた事件も、証拠となる写真や映像が(真贋はともかく)多く残されることとなったのである。さらにそれはニュースサイトに(あるいは個人のブログ等に)いとも簡単にアップロード(その際に画像処理ソフトで加工も)できるようにもなった。さらに、それを閲覧して触発された人々が、自分の写真の中に怪獣を探し始め、怪獣目撃談はリレーのように続いていくのである。少なくとも、上述の2005年の〈天池怪獣〉騒動の時は、ある種、市民参加型の怪獣探しの趣さえあった。

世界に目を向ければ、現在、ネス湖畔に設置されたライブカメラ⁵³などは、ウェブで覗き見ることが可能であり、日本でも岩手の遠野テレビがカッパ淵にライブカメラを設け、ウェブで公開中⁵⁴である。また、近年、Googleが提供しているサービス・Google Earthの航空写真に写り込んだ巨大な怪獣の写真などもネット上では飛び交っており、Google Earthは新たな怪獣探しのツールともなっている。大掛かりな探検隊も結成せず、現地へ足を運ぶこともなく、クーラーや暖房の効いた部屋で、コーヒーでも飲みながら画面に向かうというスタイルのお手軽な怪獣探しが登場したことは、これまでの人々の怪獣観にある種の変容をもたらすことになるだろうか? 怪獣探しとインターネットの関わり方については今後も注目したい。

「発見」「収集」「整理」される怪獣

前節までは、新興の娯楽商業紙、テレビ番組、DVDなどの映像ソフト、インターネットの各メディアで怪獣たちが跳梁跋扈する様子を概観してきた。これらのメディアの売りは、旬な情報を即座に伝えられることにあるが、一方、即報性という点ではやや分が悪いと思われる書籍の世界では、逆に、これまでの目撃事件や騒動の背景をじっくり追ったものや、様々な怪獣像を大量に集めて体系化、もしくはカタログ化し、整理したものが目立ってくる。

これまでの中国の怪獣本といえば、ひたすら目撃報告を列挙し、その正体をあれこれ推測するというスタイルのものが主流であった⁵⁵。30年近い歴史を持ち、オカルト事象を広く扱う科普(科学普及)雑誌『奥秘』⁵⁶なども、基本的には同様である。

しかし、たとえば、2002 年に出された税曉浩（フリーライター・カメラマン）、冷智宏（湖北テレビ・ディレクター）共著の『尋找“野人”——神農架探秘紀実』（湖南文芸出版社）は、〈野人〉騒動の舞台となった神農架取材した客観的なルポルタージュで、その土地の関係者などの話を聞きながら、〈雑交野人〉を含む一連の〈野人〉事件を考察している。単に真贋論争を展開させることはせず、〈野人〉の周辺にいる人々や社会現象にもスポットを当てている点で、従来の関連書とは一線を画している。関連する新聞報道も丹念に拾い、紹介しており、資料性も高い一冊となっている。

2008 年には、「現代の〈野人〉（当代“野人”）」の異名をとり、神農架の名物おじさんと化している張金星の自伝『張金星神農架科学探検自述 野人魅惑』（崑崙出版）が出版されている。〈野人〉を追って長年神農架の山にこもり、見つけるまでは髪も髭も切らないと宣言する彼の存在は、一種の世捨て人的な奇人——〈野人〉以上に〈野人〉的な存在としてマスメディアに取り上げられることも多かった⁵⁷が、この本で初めて、彼の活動の全容や、人間性が明らかになっている。時系列にそって日記が掲載されており、読者は本書を通じて、彼の活動を追体験することができる。

また少年少女向けの科普読み物の中には、怪獣をはじめとした不思議現象をジャンルごとに集め、概観できるようなカタログの全集物も増えてきた。『世界未解之謎』（北京出版社、2004）は上（自然の謎・動植物の謎・人類の謎）・中（古代文明の謎・古代歴史の謎・近代の未解決事件）・下（文化の謎・民族の謎・宗教の謎）の三冊組で、写真や図をふんだんに使ったオールカラー百科で、CD-ROM が付属している。〈天池怪獣〉や〈野人〉は上巻に収録されている。また姉妹編の『奥秘百科全書』（北京出版社、2004）も上（宇宙・自然・地理）・中（歴史・人類・科学技術）・下（動物・植物・未解決事件）の三冊組で、〈天池怪獣〉や UFO、宇宙人、超古代文明、神農架の〈水怪〉（なぜか〈野人〉には触れず）などオカルトについては下巻に収められている。

一方、テキストがメインながら、同様に不思議現象を項目ごとにまとめたものに『探索世界未解之謎』シリーズ（京華出版社、2005）がある。ラインナップは、1 巻が「動物と植物の謎」、2 巻が「人類の謎」、3 巻が「考古の謎」、4 巻が歴史と地理の謎」、5 巻が「自然と科学の謎」、6 巻が「宇宙の謎」となっている。そして、全集の巻頭を飾る 1 巻には「神出鬼没の水中怪獣」の章が設けられ、ネス湖のネッシーや日本の瑞洋丸が釣り上げたニューネッシー⁵⁸まで古今東西の事件が詳細に紹介されている。全集の最初にこのような題材を選んだところに、シリーズの意図がかいま見えよう。なお〈野人〉等、世界の獣人型の怪獣については、2 巻に収録されており、全 390 ページ中、実に 138 ページをすべて各地の〈野人〉の説明に割いている。

「世界之謎探索叢書」として陳雨、呉朝霞『野人與水怪』（中国三峡出版社、2006）という本も出されている。不思議現象でも特に人気の高い二種類の怪獣の紹介に特化した一冊である。神農架の〈野人〉、〈天池怪獣〉に多くのページを割いているものの、やはり世界中で報告される同様の怪獣の情報を集め、解説している。

また怪しい生物を指す総称としての「怪獣（怪兽）」をタイトルに冠した本も増加傾向にある。

「探索之旅叢書」の一冊⁵⁹として出ている舒曉主編『探尋怪獸』(新疆人民出版社, 2006)は、大きく3つの章に分かれている。第一章の「異相動物」では、神話伝説上の鳳凰, 九頭鳥, 大鵬, 麒麟, 鯢, 龍など, 中国古文献上の存在から始まり, 現代の巨大な鳥類目撃事件も紹介しているのだが, つまり, 編者はそこに同じ「怪獣」としての連続性を見ていることには注意しておきたい。その他, 双頭の蛇, 大蛇, 翼の生えた猫等々, 異形の動物たちの紹介が続く。あまり知られていない中国内の怪獣目撃事件(古いものからごく最近のものまで)も詳細に解説しており, 貴重なデータとなっている⁶⁰。ネッシーを始めとする〈水怪〉の記事もあり, 中国からも六つの湖のケースを取り上げている。第二章「類人動物」は, 現代に現れた獣人, 人魚, 人狼, サル人間などを取り上げているが, この章もやはり, まずはエジプト神話, ギリシャ神話, 中国典籍中の記述を拾い上げることから始めている。第三章「野人観察」では, その74ページすべてを〈野人〉に割いている(同書は全178ページだから四割以上は〈野人〉の記載だ)。しかも, そのほとんどは中国内の〈野人〉事件についてであり, 怪獣の中でも, 〈野人〉は別格の扱いを受けているといえよう。これもまた, ご多分に漏れず, 『山海経』など, 古文献中の〈野人〉から話を始めている。同書が扱う「怪獣」のラインナップは, 現代中国人がどのようなものに「怪獣」という二文字を与えているのか, その傾向を知る上でも興味深いものを含んでいる。

また, 同じ「怪獣」を扱ったものでも, 現実世界に出没する「実話系」の未確認動物から離れ, 純粋に「想像上の怪獣」の意匠について扱った書籍も現れ始めている。焦婷『発現神話中的怪獣』(新疆人民出版社, 2004)がそれだ。同書を読むと一応“monster”の訳語として「怪獣」を充て



舒曉主編『探尋怪獸』(新疆人民出版社, 2006)表紙。



焦婷『發現神話中的怪獸』(新疆人民出版社, 2004)表紙。

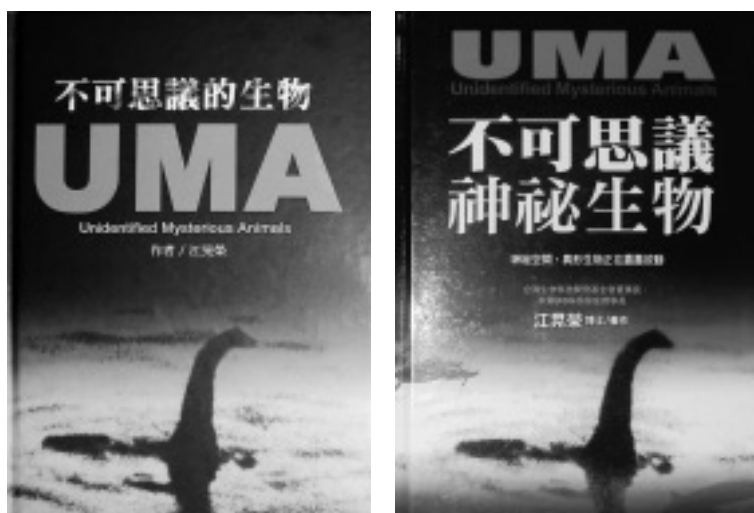
ていることがわかる。古来より人間によって生み出されてきた神話・伝説中の怪獣を、『聖書』や宗教画、各種伝説など、洋の東西を問わず様々な書物から引用して、オールカラーの豊富な図版とともに紹介し、人間の想像力に関心を向けている⁶¹。第一章では神話上の「神獣」について、第二章では「類人怪獣」について、第三章では「幻想動物」（現実世界にいない多種多様な生物の混合体）について、第四章では「特殊な怪獣」について、第五章では「神話中の龍と天神について」それぞれ詳述している。フィクションの中の怪獣像について本格的に考察を試みた、中国ではまだ珍しいタイプの研究書である。

これまでは、もちろん一番メジャーな〈野人〉については早くから単行本⁶²が出されてはいたものの、20世紀の中国では「怪獣」というカテゴリーのみを扱った専門書籍というのは例がなかった。たとえばUFOやバミュダ・トライアングル⁶³など、世界のオカルト系の事象を集めた本⁶⁴の中に一項目、〈野人〉や〈水怪〉の章が立てられるくらいで、特に謎の生物に特化したものは出されていない。現在人気のある〈水怪〉にしても、それだけで専門書が編まれるのは、1990年代以降である⁶⁵。他のオカルト事象から独立させ、かつ「怪獣」の二文字の名のもとに集めて整理するようになったのは、現代中国ではごく最近のことと言えるが、この傾向は現在の中国人の考える「怪獣」観を考察する上で、重要な意味を含んでいる。

台湾に輸出されたUMAの名前と概念

本稿冒頭において、アルファベット三文字の「UMA」は、日本でのみ使用されている和製英語であると述べた。しかし実は最近、台湾において、まったく同じ意味でこの用語を使用し、書名に掲げる書籍が現れた。江晃榮の『不可思議的生物 UMA』⁶⁶（名鑑文化出版、2006）である。著者は、このネーミングの由来について特に言及してはいないが、表紙タイトルの「UMA」の下には、「Unidentified Mysterious Animals」の表記もある⁶⁷ことから、これは日本製の「UMA」概念をそのまま輸入して使用したことは明白である。実は、「UMA」という用語と怪獣（未確認動物）の情報は、既に日本の漫画や児童図書の翻訳本などを通じて部分的には台湾に流入しており、このような書籍の登場を受容する上で、ある程度の下地はある⁶⁸。

同書の略歴欄には、著者は台湾大学の農業科学部を出て生物化学博士号を取得後、日本の京都大学の博士課程にも在籍していたとあるから、あるいは日本での留學生活の中で、この「UMA」の三文字を知ったのかもしれない。著者は、同書の「作者序」において、「UMA」の存在を信じるようになったのは、日本で「人魚のミイラ」（おそらく贋作）を見て衝撃を受けたことがきっかけであるとしている。また、「この本は台湾で初めてのUMA関連書である」と書いているように、「UMA」の概念を持ち込んで様々な怪獣現象を編集し、一書を為すということに自覚的であることがわかる。著者はUFOや超古代文明などのオカルト事象に関する（信じる立場の）研究会の代表などを務めており、既に著作も多数あるようである。同書の表紙は、ネス湖のネッシーを写したとされ、世界的に最も有名な写真となった通称「外科医の写真」（後に偽物と判明）⁶⁹である。



江晃榮『不可思議的生物 UMA』(名鑑文化出版, 2006) (左)と、改題廉価版『UMA 不可思議神秘生物』(遠鑑文化出版, 2009) (右)。改題版では中国語タイトルが若干変わり、文字も漢字の部分がアルファベットの「UMA」より大きくなっている。

オールカラー160ページにも及ぶ同書は、世界各地のいわゆる未確認動物を写真(もちろん真贋は不明なものが多い)やイラストをふんだんに使用し、解説している。全六章からなり、それぞれに以下のようなタイトルが付けられている。「1. 水中不可思議的生物」「2. 陸上不可思議的生物」「3. 不明水中物体と不明飛行生物」「4. 神話伝説中的神秘動物(第一節は「山海経中的神秘動物)」「5. 現代生物技術が作った生物」「6. UMAのルーツの真相を追う」。

日本のUMA書籍から大きな影響を受けていることは明らかで、一応、世界のUMAを紹介してはいるが、特に日本伝統の「カッパ」などにかなり多くページを割いている⁷⁰。

最初のうちは、オーソドックスな未確認動物や神話伝説中の怪獣を説明しているのだが、最終章では「誰が人類を創造したのか?」と問い掛け、中国神話を引用しながら、「地球の生命の起源は高等な科学技術を持った宇宙人が作ったものである可能性が高い」と話が壮大になっていく。最終節「UMA 結論」では、著者自身の専門である発酵の問題にこじつけて話を展開させるのだが、曰く、発酵食品にも失敗作はあり、通常は研究者によって破棄されるが、その一部は記念品として残されることがあるとのこと。同様に、「UMA」も宇宙人が作り損なった生命の失敗作で、その大部分は破棄されるものの、一部が残っているのだろう、とのことである。本人も「大胆な仮説」としているが、かなり飛躍のある論である。

このように内容的にはかなり問題の多いオカルト本であるが、台湾において「UMA」の名を冠した概説書としては初めての著作物であることは確かである。本書の登場によって、今後この概念が「UMA」の名称とともに定着していくかどうか、またどのような展開を見せるかなど興味は尽きない。

大陸初の特撮ヒーロー番組に現れた「UMA」

一方、大陸ではどうかと言うと、現在までのところ「UMA」の三文字を冠した怪獣関連の書籍を、私は寡聞にして知らない。しかし2008年、その言葉は意外な場所で使用されることとなった。中国初の本格特撮変身ヒーロー・ドラマ『金甲戦士』のサブタイトルとして、である。

2008年秋から中国大陸の複数の放送局で放送され、現在でも各地で再放送が行われている『金甲戦士』は、副題に「Unidentified Mysterious Animal」という、くだんの和製英語を持っている。劇中は「UMA」——中国語表記は「优玛(yōumǎ)」——と略称で呼ばれる生き物は、玩具のぬいぐるみくらいの大きさの可愛らしい宇宙生命体たちである。

時代設定は近未来。ある日、宇宙生物を輸送中の宇宙船が宇宙海賊たちの襲撃に遭い、地球へ墜落してしまう。その際、宇宙船の中の生物たちは地球の各地に四散。地球環境との接触は危険である上、くだんの宇宙海賊たちがその生物たちを生物兵器として利用しようとしていることが



『金甲战士』全52話DVDセット。
イラストで描かれた可愛らしい「UMA」たちの姿も見える。



同オープニングタイトル。

判明。そこで地球の(というより中国の)若者5人からなる「UMA 特別救助隊(优玛特救隊)」が結成され、「UMA」の発見と保護を中心に活動を開始する。宇宙海賊との戦闘で重傷を負った隊長は、中国古代伝説中の金甲戦士のパワーを得て復活。ピンチになると金甲戦士に変身し、隊員たちとともに、地球環境の保全と、全「UMA」の保護を目標に、宇宙海賊たちと戦っていくというストーリーである。

ヒーローの形象や各種設定には、『ウルトラマン』や『仮面ライダー』等、日本の特撮やアニメ作品の影響がかなり色濃く出ている⁷¹が、各エピソードに込められた現代中国的テーマについては、非常に興味深いものがある。また小説や雑誌、関連玩具等のメディアミックス的展開などについても思うところはあるが、それらは、またの機会に改めて考察ををするとして、今は、ここで「UMA」と呼ばれる怪獣たちをめぐる描写について少しだけ考えてみたい。

「UMA」という名称の具体的説明、その由来などは劇中、特に語られるわけではない。毎回、様々な形態や特徴を持った「UMA」が現れ、ある時は宇宙海賊の怪人に変身(戦闘員と合体すると怪人化)して金甲戦士やUMA特救隊を苦しめるが、最終的にはもとの姿に戻り、隊員たちに「発見」され、捕獲機で「収集」され、カードの形で「整理」されていくのである。この「発見」と「収集」、そして「整理」へ至るプロセスは、まさに「未確認(unidentified)の動物」としての怪獣を「確認(identified)」していく作業行程である。作劇上は「保護」であるが、それは一種の



『金甲战士』の小説版『UMA』(少年儿童出版社, 2008)。表紙は、毎回レギュラーで登場する「UMA」ペロータ。隊員たちのマスコットの存在となっている。

怪獣ハントであり、「捕獲」と何ら変わるものではない。番組の最後に、その回で「収集」された「UMA」がデータ・カード化⁷²され、出演者のひとりによってその「UMA」のプロフィールが、個別の名前も含めて紹介されるのは象徴的である。それはある意味博物学的志向でもあり、子供たちは毎回、一話見終わるごとに、「UMA」たちの情報を整理し、頭の中の怪獣カタログのアイテムを増やしていくのだ。

劇中登場する「UMA」は、非常に可愛い小さなキャラクターである。これはおそらく、中国でも人気の日本の『ポケットモンスター（中国語では「口袋怪獣（妖怪）」などと訳される）』にインスパイアされたものと思われる（かつて『山海経』の図版が日本の妖怪形象に影響を与え、今、日本の怪獣像が中国へ輸出されているという現象が進行中であることも興味深い）。超能力を持った異形の生物であるという点では、従来の意味での「怪獣」を充てて差し支えない性格を持った存在であるが、制作者は敢えて、おそらくは中国大陆ではまだそれほど市民権を得てはいないであろう「UMA（优玛）」という総称を用いた。その意図は不明であるが、近未来を舞台にした、中国初の特撮ヒーロー番組を始めるにあたり、手垢にまみれていない新鮮なネーミングと、新しい概念を必要としたのかもしれない。しかし、それにしても記念すべき最初の作品で、倒さずに「収集」する対象である相手の怪獣を「UMA」と呼称したという点は、現代の怪獣たちがすべからず「確認」されるべき存在として立ち現れることを考えれば、実に示唆的である。もはや現代の怪獣は、単に畏怖の対象や敬して遠ざける存在などではなく、「発見」「収集」「整理」されることを運命づけられた「UMA」なのである。

日本では1960年代以降、ネッシーや雪男などの「実話」としての怪獣たちの物語が盛んにメディアで取り上げられ、少年誌などでも頻繁に特集されるという現象が見られたが、原田実氏は、そのような怪獣の存在こそ、「創作としての怪獣のリアリティを保証する担保となっていた」⁷³と見ている。実在するかもしれない怪獣たちが、当時の『ウルトラQ』『ウルトラマン』などに始まるテレビや映画での空前の怪獣ブームを陰で支えていたというわけである。とするならば、長らく特撮の創作怪獣不毛の地であった中国大陆において、このタイミングでまさにその「UMA」が登場する『金甲戦士』が制作され、続いて第二弾の『鎧甲勇士』も人気を博しているというブームの裏には、本稿で再三見てきたような、「実話」としての〈野人〉や〈水怪〉といった怪獣の情報が、1990年代半ば以降急速な勢いで発達していったメディア——娯楽商業紙、書籍、テレビ、VCD、DVD、ネット動画などを通じて繰り返し一般市民に消費され、怪獣や、ひいては新しい概念である「UMA」という存在を違和感なく受容できる下地が整ってきたということがあるのかもしれない。

もちろん、『金甲戦士』の登場には、それだけではなく、温家宝首相が名指しで取り上げる⁷⁴ほど中国で大ヒットしていた日本の『ウルトラマン』シリーズの存在⁷⁵と、21世紀に入ってから力を入れている子供向けの国産アニメ作品量産という政策⁷⁶など、様々な背景が絡んでいるのは確

かである。しかし、多種多様なメディアで、日常的に目にする機会の増えた怪獣情報の洪水と、それを娯楽として受容するようになった中国人のライフスタイルの変化が、このようなフィクションの怪獣の量産化を招く導火線になっていたことは、想像に難くない。

本稿では、主に現代の中国メディアの中で扱われる怪獣事象を多少駆け足ながら概観し、21世紀に入ってなお増え続ける怪獣の言説について若干の考察を試みた。もちろん、個々の事例についてまだまだ研究の余地はあるし、それぞれに今一歩踏み込んだ検証が必要であることは自覚している。本稿を執筆するにあたって新たに生まれた課題も多いが、これからの宿題としたい。

この中国で新たな展開を迎えた「怪獣文化」が、今後どのように変化していくのか、また、中国人はどのような事象を「怪獣」としてとらえ、表現していくのか。生まれ続ける怪獣の物語を追いながら、さらなる考察が加えられたらと考えている。

注

- 1 原田実氏によれば、かつてはテレビや映画のフィクションの怪獣も、現実世界に出没する謎の生物も、等しく「怪獣」と呼ばれていたとし、次のように述べている。「ところが70年代後半の怪獣ブーム末期になると、怪獣はフィクションのものに限るというコンセンサスが生じ、ヒバゴンやツチノコなどの怪生物については別の呼称が必要となった」(原田実「未確認動物の精神史」、『新潮45』2008年9月号所収, 138頁)。そのため、以降は「未確認動物」や後述する「UMA」という呼称が定着するようになっていったのである。
- 2 「Unidentified Mysterious Animals」の略で、先行する「未確認飛行物体」を指す「UFO」からの発想であるが、「UMA」は日本でのみ使用されている和製英語。動物学者の実吉達郎氏が、未確認動物という概念を表す言葉として、その著書『UMA——謎の未確認動物』(スポーツニッポン新聞社出版局, 1976)によって初めて使用し、以降、日本のテレビ番組や書籍等のメディアによって広められた。ただし、この表現自体は、SF作家の南山宏氏が提案したものであるとされる。命名の経緯については、南山宏『謎の巨大獣を追え 未知動物〈ヒドン・アニマル〉の正体を徹底検証』(廣済堂, 1993)、実吉達郎『UMA 解体新書』新紀元社, 2004) 参照。
- 3 2004年7月3日～9月5日に川崎市民ミュージアムでおこなわれた『『日本の幻獣』——未確認生物出現録』および、関連イベント(妖怪文化研究フォーラム)として開催されたシンポジウム「幻獣から怪獣へ日本文化における『ありえざる獣』の系譜——」,そしてこれらのムーブメントに関わった著者による成果、湯本豪一『日本幻獣図説』(河出書房新社, 2005)等参照。これは、既に市民権を得ている「妖怪」という概念の中から、特に「生物としての痕跡」を残している存在を、新たに「幻獣」という枠組みを設けて抜きだそうとする実験的な試みであった。一方で、現在の日本でこのような怪異の概念の細分化が進められたり、その結果を自明のこととする書籍が氾濫したりしている現状に疑問を呈し、「幽霊」や「妖怪」などに分けられる前(江戸時代から昭和前期にかけて)のゆるやかな概念としての「化け物」という概念に立ち戻ることを提唱する意見もある。原田実『日本化け物史講座』, 楽工社, 2008) 参照。
- 4 2007年12月9日におこなわれた科学言説研究プロジェクト第4回公開研究会「UMAのいる科学史」, およびその成果をまとめた『生物学史研究』(80)「特集 UMA(未確認動物)のいる科学史(2007年度シンポジウム報告)」2008/9日本科学史学会生物学史分科会。『生物学史研究』同号の掲載論文は以下の通り。林真理「未確認動物の存在論: 「UMAのいる科学史」を論じるにあたって」, 下坂英

- 「生物学史と「未発見動物」」，伊藤龍平「未確認動物の民俗学へ——『信濃奇勝録』の異獣たち——」，齊藤純「怪獣もいる科学史」，菊地原洋平「西洋における怪物伝統のなかのUMA」。
- 5 本稿では詳しく扱えなかったが，〈水怪〉もまた，1980年に吉林省・長白山のカルデラ湖・天池（湖の中を北朝鮮との国境が走っている）に現れた〈天池怪獣〉の事件以降，現在に至るまで，新疆のカナス湖の〈水怪〉など複数の地域で目撃例が報告されているポピュラーな存在である。〈水怪〉については，拙稿「長白山「天池怪獣」の形態学」（『饗養』第14号，中国人文学会，2006年9月）参照。また，国境沿い（天池）や民族問題を抱える地域（最近，2009年7月にも民族間の対立が顕在化し，武力衝突が起きた新疆ウイグル自治区のカナス湖やサイラム（賽里木）湖）など，政治的緊張状態のある場所にこうした目撃談が集中するのは興味深い。たとえば，トルコのワン湖にはジャンノ（ジャンナワール）と呼ばれる水棲怪獣がいるといわれているが，現地取材を敢行した作家の高野秀行氏は，地元民の間の見解として，この騒動が主に極右の政治家から発信されていることから，クルド民族問題から世間の目を逸らそうとする政治的意図があるのだという説を紹介している。ジャンナワールが話題になった1993年から97年にかけての時期は，PKK（クルディスタン労働党）と政府軍の戦いが激化し，政府から迫害されたクルド人たちがワン湖周辺へ移住を余儀なくされた（ワン湖周辺の住民の9割はクルド人である）時期と一致するという。高野秀行『怪獣記』（講談社，2007，67-69頁）参照。また中国の〈野人〉のケースに見え隠れする政治的プロパガンダについては，拙稿「怪獣とプロパガンダ——中国「野人」をめぐる言説に潜む政治と科学——」（『饗養』第11号，2003年10月），日本の九州は池田湖にイッシー騒動が持ち上がった時期と，放射能漏れを起こした原子力船「むつ」の佐世保入港騒動の時期が重なっている問題については，拙稿「怪獣使いと少年——現代水棲怪獣の形態学4——」（『火輪』第17号，『火輪』発行の会，2005年3月）参照。また，このような各地の怪獣騒動と政治の問題についても，いずれ稿を改めて整理したい。
 - 6 1976年の最初の国家レベルの〈野人〉調査隊が組織され，現地に調査基地が設置されたが，その名称は「鄂西北奇異動物考察事務局」であった。
 - 7 「天池怪獣」事件の第一報である『延辺日報』1980年9月18日の記事では，「動物」「奇異動物」といった表現がされていた。続く『光明日報』同年10月9日の記事では「巨大怪獣」「怪獣」の文字が見出しに躍り，『人民日報』同年10月11日の記事の見出しは「長白山天池に奇異動物出現（原文：長白山天池中发现奇异动物）」であった。
 - 8 佐藤純氏は日本語における「怪獣」使用例の変遷を追っている。それによれば最も古い例は近世に入ってからで，当時の随筆や小説の中に「妖怪じみた動物としての「怪獣」」たちが現れてくる。歴史学・民俗学の扱う近世以来の「怪獣」に，大正以降（1925年の『ロスト・ワールド』，1933年の『キング・コング』，そして1954年の『ゴジラ』といった映画の怪獣たちの登場以後），新しい要素「巨大さ」が加わっていったとする。佐藤純「妖怪と怪獣」（常光徹編『妖怪変化』，ちくま新書，1999）所収）参照。とするならば，少なくとも1970年代後半までの日本で，現在は「UMA」「未確認動物」などと呼ばれている存在を「怪獣」と呼称していたのは，近世以来日本人が使ってきた従来の意味での「妖怪じみた動物」を表す正統な使用法だったと言える。
 - 9 中国古代の地理書。詳しい成立年代は不明だが，漢代までには成立したと言われる。『山海経』について詳しくは，松田稔『『山海経』の基礎的研究』（笠間書院，1994）参照。
 - 10 原文は以下の通り。「又東三百八十里，曰猋翼之山，其中多怪獣，水多怪魚，多白玉，多蝮虫，多怪木，不可以上」。
 - 11 1884年，上海で申報館から創刊された画報。内容は時事報道，科学，文化，風俗，海外の文物など多岐にわたる。呉友如（1840？-94）をはじめとする絵師たちの描く画報は，活字情報のみならず，視覚的な楽しみを多く読者に提供した。『点石斎画報』出版事情の詳細，そこに掲載された作品世界については，中野美代子・武田雅哉『世紀末中国のかわら版 絵入新聞『点石斎画報』の世界』（福武書店，1989）および，その増補改訂版（中公文庫，1999），参照。
『点石斎画報』は，主に『申報』などの大新聞に載った記事をニュースソースにすることが多いが，

西洋の報道に材を取ったものも少なくない。同時代の蘇州出身の作家、包天笑は、その著書『鉤影楼回憶録』第31章)の中で少年時代を回想し、画報が上海から蘇州に送られてくるとおやつを食べるのを我慢して必ず購入し、楽しんでいた(筆者注:つまりそれくらい価値であった)と述べている。また包天笑の記述からは、海外の最新ニュースや、「飛行艇」のような外国の発明品の情報などは、まず上海に入り、それらの記事を『点石齋画報』がわかりやすくビジュアル化して地方へ配信していたという構図が見えるが、当時において、この安くて大衆にわかりやすい画報が果たした情報メディアとしての役割は大きい。もっとも、包天笑自身も笑い話として書いているが、上述の「飛行艇」のイラストは帆や櫂が描き込まれるなど、まさに「空飛ぶ船」として描かれている。おそらく絵師は本物を見たことはなく、それは「飛行」と「艇」という単語から創作したものであったと思われる。ただし、そのような絵からもある程度の知識を学ぶことができたこと、包天笑は述懐している。包天笑『民国筆記小説大観(第四輯)鉤影楼回憶録』(山西古籍出版社・山西教育出版社, 1998)を参照。

- 12 その中には、日本に現れた怪獣たちの報道も少なくない。詳しくは武田雅哉「清朝末期の画報に見える日本の怪物報道」(小松和彦編『日本妖怪学大全』, 小学館, 2003, 所収) 参照。
- 13 オリジナルの『山海経』には、もともと絵図が付けられていた可能性が指摘されているが、現在に伝わってはいない。時代は下り、明清時代には『山海経』に様々な挿絵を新たに付け加えた書籍がブームとなったが、そこで描かれた絵がその後、引用・流用を繰り返すことにより、人々の心の中にある定まった妖怪像を植え付けることになったとも考えられる。当時の挿絵入り『山海経』の代表的なものは、馬品儀『古本山海経図説』(山東画報出版社, 2001)などで、そのバリエーションを比較・参照することができる。また、このように新たに書き起こされた『山海経』の図版の数々は、近世の日本にも版本が流布し、たとえば鳥山石燕は『百鬼夜行図』の自跋において、この『山海経』を手本にした旨が記されている。香川雅信氏は「近世の日本において、『山海経』は一種の「妖怪図鑑」であったのだ」(香川雅信『江戸の妖怪革命』, 河出書房新社, 2005, 124頁)としている。
- 14 このことは、前掲中野美代子・武田雅哉『世紀末中国のかわら版絵入新聞『点石齋画報』の世界』において既に指摘されている。
- 15 拙稿「中国人の“野人”イメージ——目撃報告と文学作品に現われた現代の妖怪」(『饗養』第9号, 中国文学学会, 2001年11月)等参照。
- 16 1970~80年代の中国の〈野人〉調査の経緯については、拙著『中国「野人」騒動記』(大修館書店あじあブックス, 2002), 劉民荘『中国神農架』(文匯出版社, 1993)等参照。
- 17 このことは、騒動当時に、すでに中野美代子『中国の妖怪』(岩波新書, 1983)などで指摘されている。さらに、それに1990年代末の〈野人〉をめぐる物語の文学的背景にも言及した前掲拙稿「中国人の“野人”イメージ——目撃報告と文学作品に現われた現代の妖怪」等参照。
- 18 1981年には一部の研究者やマニアによる「中国“野人”考察研究会」が発足する。
- 19 その中には、後(2000年)に中国出身の作家としては初のノーベル文学賞を受賞することになる高行健(現在は亡命してフランス国籍)の舞台劇脚本作品『野人』(初出は雑誌『十月』1985年第2期)も含まれる。彼の代表作『霊山』(1989年)にも、神農架の〈野人〉についての言及がある。また、同時期の〈野人〉を扱った文学作品、漫画作品などについては枚挙にいとまがないが、詳しくは前掲拙著『中国「野人」騒動記』参照。
- 20 この時の〈雑交野人〉騒ぎは、翌1998年末の経済特区・深圳市の深圳博物館でおこなわれた〈野人〉展覧会(内実は深圳の富裕層に神農架への投資を訴えるもの)や、同イベントを企画した旅行者による多額の懸賞金をかけた〈野人〉ハントツアーへとエスカレートし、最終的には1999年1月14日に中国共産党機関誌『人民日報』紙に「野人などいない」と釘を刺され、商業主義で自然破壊を招く一連のプロモーションが完全に批判されるに至る。詳細は拙稿「中国神農架の観光開発——謎の怪獣“野人”を使ったプロモーション展開」(『第6回観光に関する学術研究論文入選論文集』アジア太平洋観光交流センター, 2000, 所収), 前掲拙著『中国「野人」騒動記』等参照。

- 21 山の獣人型妖怪が人間の女性（あるいは男性）をさらって、自分との子供を作るとするのは、西晋・張華の『博物志』、東晋・干宝の『搜神記』などにも見ることのできる古くからのモチーフである。唐代には同じモチーフを持つ伝奇小説『補江総白猿伝』も書かれている。詳細は前掲の中野美代子『中国の妖怪』、拙著『中国「野人」騒動記』参照。なお、現代において人間と〈野人〉のハーフの問題が取り沙汰されたのはこれが初めてではなく、1980年4月19日の上海『文匯報』に、四川省巫山県にいたという人間とサルとの合の子＝「猴娃」ではないかと言われた人物についての記事が載り、世界にも配信された（たとえば日本では2日後の4月21日『毎日新聞』等に掲載）。「猴娃」については、四川省巫山県志編纂委員会編纂『巫山県志』（四川人民出版社、1991）巻34「雑志 第二章軼聞」に載せる呂啓乾「“猴娃”はいったい誰の子なのか？（原文：“猴娃”到底是谁的后代）」（同書690-682頁）に詳しい。また、実際に「猴娃」の取材調査を行った劉民莊『中国神農架』（文匯出版社、1993）にも詳しい分析がある。
- 22 〈雑交野人〉騒動の顛末については、拙著『中国「野人」騒動記』や、税曉洁、冷智宏『尋找“野人”——神農架探秘紀實』（湖南文芸出版社、2002）参照。
- 23 テレビの普及が中国社会に与えた影響については、ジェームズ・ラル著、田畑光永訳『テレビが中国を変えた』（岩波書店、1993、原書はJames Lull, *CHINA TURNED ON Television, reform, and resistance*, Routledge, London, 1991）参照。
- 24 特に「10大ヒット商品」の記事では、VCDプレイヤーをトップ項目に挙げており、以下のような記事を書いている。「1997年は、VCDプレイヤーほどあつというまに人気が発火したといえる商品もなく、またVCDほど台風のごとく全国を席卷し、億万の中国人家庭に受け入れられるところとなつたといえる商品もない。もし[今年を]「××年」と選定するのであれば、非常に多くの人が投票してこう言うだろうと信じる。「1997年は掛け値なしに“VCD年”だった」と。相次ぐ大幅な値下げは、一台のVCDプレイヤー単価を年初の2000元超から、年末の数百元まで下落させた。このような大きな誘惑の中で、それでも座視してられる家庭がどれだけあるというのだろうか？ カラーテレビ、洗濯機の中国での普及には数十年の時間を要したが、このような趨勢のおかげで、VCDプレイヤーはたった数年かかけただけですぐに殿堂入りを果たすことができ、億万の家庭の消費空間を占領したのである。熱狂的なVCDフィーバーは、中国マーケットの強大な購買力を充分に誇示した。（同誌59頁。原文：1997年、没有哪一个商品像VCD影碟机那样神速走红，也没有哪一种商品像VCD一样如台风般席卷全国，为亿万中国家庭所接受。如果评选“××年”，相信会有相当多数的人会投票说，1997年是不折不扣的“VCD年”。连续的大降价，使得一台单碟VCD机从年初的超过2000元跌为年末的数百元，在这样巨大的诱惑下，还有多少家庭安坐不动？彩电，洗衣机再中国的普及用了数十年的时间，而依这种趋势，VCD机只需数年即可登堂入室，占领亿万家庭的消费空间。疯狂的VCD热充分显示了中国市场强大的购买力。）」。
- 25 いずれもデータは『中国統計年鑑』（1997-2001年版、中国統計局）より。なお、VCDプレイヤー普及率の数字は1997年版で初めて掲載される。
- 26 ただし〈雑交野人〉の映像自体は、時期など詳細は不明ながら中国国内のテレビ番組で取り上げられていたことが、複数の書籍の記録から判明している。また、1990年代はじめにかけては、日本でもこの映像がしばしばオカルト系のバラエティ番組で紹介されてもいる（前掲拙著参照）。ただし、当時の中国の庶民にとっては、ビデオデッキの普及率も低かったため、テレビ番組とは「見流す」ものであり、録画して観賞するものではなかった。自由に巻き戻したり繰り返し再生したりすることが可能なメディアで〈野人〉関連映像を鑑賞できるという環境は、まさにこの時が最初である。1990年代末のVCDプレイヤーの登場と普及は、中国人の映像コンテンツに接する生活のスタイル自体を、大きく変えるものであったといえる。
- 27 それまでの党機関誌『人民日報』などに変わり、1990年代半ばから町のスタンド販売スタイルの個人購入による商業紙が大躍進し、閲読率を上げていく現象と、その背景については、渡辺浩平『変わる中国 変わるメディア』（講談社現代新書、2008）参照。

- 28 たとえば、1934年、ネス湖のネッシーの写真(1994年に関係者が偽物と告白)とされるものを最初に掲載し、また1953年にヒマラヤへ大掛かりな雪男探検隊を送り込んだのは、ロンドンのタブロイド紙『デイリー・メール』紙であった。同紙の探検隊の記録にはRalph Izzard, *The Abominable Snowman Adventure*, Hughes Messie & Co., Ltd, 1955(邦訳は村木潤次郎訳『雪男探検記』, ベースボール・マガジン社, 1957など)がある。また、日本の『東京スポーツ』紙も、ツチノコや河童などの報道を頻繁におこなっているが、虚実ないまぜの記事を掲載し、それを話半分に読むことが、書き手と読み手との間のいわずもがなの了解事項になっている。
- 29 筆者とともに1998年の神農架探検(取材)に同行した留学生仲間・梅木紀任氏が、2001年に雲南省の省都・昆明市の駅前の特設会場で神農架の〈野人〉を紹介する展示イベントに遭遇している。同様な形式のイベントは早い時期からおこなわれていたようで、最初の神農架〈野人〉騒動直後の1983年夏、武田雅哉氏が、四川省の省都・成都市内の公園の一隅で「野人科学調査報告展覧」を観覧している(武田雅哉『翔べ! 大清帝国』, リプロポート, 1988年, 62-68頁)。中身はいずれも、〈野人〉を目撃した人の写真や証言を延々と紹介したものであったという。どのくらいの規模で、どのような土地を巡ったのかなどの詳しいデータはないものの、このように地方を巡回する、言わば見せ物的な興行が、特にまだテレビの普及率も高くなかった時代にあつては、神農架の〈野人〉の名前を全国の人々に浸透させる上で一定の役割を担っていたであろうことは、想像に難くない。ちなみに最初の〈野人〉騒動の真ただ中であつた1978年のテレビの普及率は百世帯当たりわずか0.3台(うち都市部は1.3台)。騒動がピークに達し、最後の国家レベルの調査隊が送り込まれた翌年、1981年時点でも、百世帯あたりわずか1.6台(うち都市部は5.6台)である(データはいずれも『中国統計年鑑』1981年版, 中国国家统计局)。また、「見せ物として提示される怪獣」については、中国に限らず非常に興味深いテーマのひとつであるが、この問題についての考察はまた稿を改めたい。
- 30 下坂英「未発見動物学」(『科学見直し叢書1 科学と非科学のあいだ大衆と科学』, 木鐸社, 1987)参照。下坂氏は、「権威への反発という魅力は、もし、未確認動物学が公認されてしまえばなくなってしまう」(同書128頁)とし、以下のように説明している。「それに、もし公認されたとなると、未発見動物学からは、そのうさんくささというか通俗性が払拭されて行くだろう。さらに通常科学としての形態を整えて行けば、段々と素人にはわかりにくいものになってくる。これらのこともまた、ファンをよせつけなくするだろう。まさに、現代の科学がそうであるように。学会誌などに登場する、地味で、実証的、禁欲的なレポートなどに、興味をひかれる人は少ないだろう。大げさな表現で、想像力を働かせ、論理を飛躍させて、素人をロマンの世界に誘ってくれるTV番組や雑誌の記事などの方が、魅力的なのである」(同書128頁)。
- 31 『論語』「述而篇」の言葉。原文「子不語怪力亂神」。
- 32 『中国統計年鑑』(2008年版, 中国国家统计局)。
- 33 以下のデータは、中国在住の友人からご教示いただいたもののほか、以下の中央電視台の番組サイトの放送記録を参考にした。「走近科学」公式サイト: URLは<http://space.tv.cctv.com/podcast/zoujinkexue>(最終確認日2009年8月12日)。ただし、2005年以前の放送については、データに乏しく、網羅的ではないことをお断りしておく。
- 34 〈雑交野人〉に関しては、上述のように既に騒動直後の1997年、遺骨を掘り出しての科学鑑定がおこなわれ、骨格に異常が見られるものの、いわゆる人と〈野人〉との混血ではありえないという結論が、一部メディアによって報道されている。またこの時の鑑定には、北京原人化石の研究で著名な中国社会科学院の古人類学者・賈蘭波も立ちあっている。この経緯については香港の雑誌『前哨』1999年1月号(香港明力有限公司出版)などの記事が伝えているが、より詳しい内容については、税曉洁、冷智宏『尋找“野人”——神農架探秘紀実』(湖南文芸出版社, 2002)の第九章(204-224頁)参照。中国では既に鑑定結果は周知されているが、にも関わらず、日本では最近まで「〈野人〉と人間との合の子」として紹介しているメディアやオカルト系書籍が多かった。ただし、2005年には日本のバラエティ番組(2005年6月11日放送、テレビ朝日「世界超常現象審議会 ㊟スクープ・サミッ

- ト!!」で〈雑交野人〉の親族に取材するなど、その真相を伝えるメディアも増えてはいる。書籍では前掲拙著『中国「野人」騒動記』のほか、U-MAT・超常現象研究所『世界UMA——未確認生物——探検記』（ミリオン出版、2004）、山口敏太郎『世界未確認生物UMA画像300』（ダイアプレス、2008）、天野ミチヒロ「未確認生物ヒストリー——UMAの虚構と真相・雑交野人にされた男の悲劇」（『不思議大陸アトランティア発動編』、徳間書店、2009、所収）などが、騒動の顛末にまで触れている。
- 35 このような中国の科学番組内における娯楽第一の演出法については、拙稿「天池怪獣探検隊西へ（後編）——現代水棲怪獣の形態学6——」（『火輪』第19号、『火輪』発行の会、2006年3月所収）、『水中からの挑戦——現代水棲怪獣の形態学——』（『火輪』第20号、『火輪』発行の会、2006年9月所収）参照。また、娯楽として消費される科学番組の中の怪獣物語については、拙稿「中国の怪獣〈野人〉と〈水怪〉——現代中国を徘徊する妖怪イメージ」（『スラブ・ユーラシア研究報告集1 共産圏の日常世界——科学研究費研究「スラブ・ユーラシアにおける東西文化の対話と対抗のパラダイム」（2005-2008）成果』、北海道大学スラブ研究センター、2008年12月、所収）参照。
- 36 たとえば、2006年11月14～15日に「走近科学」で放送された「金湖水怪之谜」の映像素材が、そのまま翌2007年2月11～12日に江西衛視の「伝奇故事」という番組で流用されていることが確認できた（ただし、司会者による解説部分のみ新撮）。
- 37 番組の内容を編集してソフト化したものには、『探索・発現神農架野人』（中国国際電視總公司出版、2004）、『発現之旅——野人之謎』（広州俏佳人文化伝播有限公司、発行年未記載）、『CCTV 走近科学喀納斯猜想』（北京科影音像出版社、発行年不明）、『CCTV 神秘生物調査』（北京科影音像出版社、発行年不明）等がある。
- 38 〈野人〉や〈水怪〉の特集を文章化したものとしては、以下のものがある。王新建主編『探索・発現神秘中国』（百花文芸出版、2003）、薛継軍主編『発現之旅9』（上海科学技術文献出版社、2005）、CCTV《走近科学》欄目著『《走近科学》叢書——中国水怪調査』（上海科学技術文献出版社、2007）、CCTV《走近科学》欄目著『野人之謎全記録』（上海科学技術文献出版社、2009）。その多くが、番組のナレーションをなぞる文章となっており、使用されている図版も、番組中の映像からの流用がほとんどである。
- 39 原文は以下の通り「几年前看过一个栏目中央台的，讲述了一些探索发现的故事，但不是〈探索发现〉，记得其中3个故事：1. 讲神农架野人的，2. 讲中国境内一条河的水怪的，3. 讲一个地方挖出很多奇怪的尸骨的，是后来分析是这个地方遭受水灾还是什么造成的…… 请问这是什么栏目！但不是〈探索发现〉また、原文中、一部意味の取りづらい箇所があるが、それは後述のように、回答者によって指摘されている。「百度知道」URL：<http://zhidao.baidu.com/question/51976206.html>（最終確認日：2009年7月19日）
- 40 原文「不是《探索发现》，是《走进科学》。给你个我们国家新疆的喀纳斯湖说的那个水怪的视频地址。（中略）对于其它的我想也不必我多费心，只要你知道这个栏目，里面好多东西都是特让人感兴趣的，我也很喜欢这个节目。《探索与发现》这个栏目也不错的，我也很喜欢。」。
- 41 原文「问题补充：也不是《走进科学》」。原文中、「走進科学」とあるが、これは中国語で「近」と「進」の発音が同一のために混同されやすいことから、よく見られる誤記である。
- 42 原文「怎么会不是《走进科学》呢？我记得是这个节目讲过你说的那些内容啊。你倒底想要什么呀？是看你说的东西，还是什么什么呀？」。
- 43 原文「所谓的调查非常草率，所谓的结论非常荒唐，每次都故弄玄虚，哗众取宠，拍的像鬼片，最后得出一个莫名其妙的结论。」。
- 44 たとえば上述した〈雑交野人〉（猴娃）について取り上げた「走近科学」2007年5月5日放送では、鑑定結果から〈雑交野人〉が一種の奇形児であることはほぼ確実で、〈野人〉との合の子の可能性はないことは明白ながら、司会者の以下の言葉で締めくくられている。「最先端の技術を借りて、さらに多くの猴娃の秘密を知ることが、我々の望みです。〈野人〉の謎がいずれ白日の下に照らされる日

- が来ることも、我々は望んでいます」(原文は以下の通り「借助一些先进的技术知道猴娃更多的秘密，这是我们的希望。我们也希望野人之谜能够终究大白于天下」)。
- 45 松井健氏は、未確認動物の調査研究においては、自然科学の専門家の介入が、かえって人々の空想を刺激する点をこう指摘している。「九九パーセントの確率で真であるという言い方は、その分析の手順について知識のない素人にとっては、一パーセントのまったく別の可能性を許すものとして理解される」(松井健『自然の文化人類学』、東京大学出版会、1997、第7章「想像的なもののリアリティ」205頁)。
 - 46 21世紀中国総研編『中国情報ハンドブック [2008年版]』(蒼蒼社、2008)。
 - 47 特に2005年は中国各地で〈水怪〉目撃事件が相次ぎ、市民の興味も〈水怪〉に向いていた。翌2006年1月中旬(中国の旧暦では2006年末)に、上述の「走近科学」で7夜連続シリーズ「中国水怪調査」が放送されたのは、このような事態を受けてのことである。
 - 48 中国語ニュースサイト『新浪』掲載の2005年7月10日の記事参照。<http://tech.sina.com.cn/d/2005-07-10/1526658813.shtml> (最終確認日2009年8月3日)
 - 49 第一報は7月29日のウェブサイト『新華網』に掲載。翌30日に新聞各紙が報道した模様。ここでは、『人民網』2005年8月2日掲載の記事を参考にした。<http://news.0898.net/2005/08/02/182107.html> (最終確認日2009年8月3日)。
 - 50 R・ウェストラムは、1933年に始まる大海蛇の目撃事件のデータを詳細に分析し、目撃報告が集中する年代、季節、媒体、目撃者の社会的階級によってどのような傾向があるかを導き出している。その中で、新聞や雑誌の記事が大海蛇の報告にとって非常に重要である点として、以下のように述べている。「この、報告の公開という現象は、たとえば大衆雑誌において、大海蛇についての記事が掲載されたあとにもっとも明白になる。自分自身で目撃をした人が、その記事を読むと、しばしば、その記事を書いた人に手紙を出し、自分自身の体験を詳細に語るのである。このことは、その著者の所有するデータのたくわえを増やすだけでなく、たびたび同じ雑誌上にさらに報告が載るという結果にもなる。大海蛇の記事は、自分自身の目撃を報告しないでいた人に、他の人も同様の体験をしていると考えるよう激励するのだ」。R・ウェストラム著、下坂英訳「大海蛇目撃事件」(R・ウォリス編、高田紀代志ほか訳『排除される知——社会的に認知されない科学』、青土社、1986、107頁)。
 - 51 このような現象は、かつて日本で1970年代にブームとなった心霊写真の場合に近い。当時はオカルトブーム全盛で、テレビで頻繁に取り上げられる心霊写真に触発された視聴者が、自分が過去に撮影した写真の中から怪しい物を探し出し、テレビ局などに送って鑑定を依頼するという現象があった。これもまた、当時普及し始めたコンパクトカメラという新しい製品を使い慣れないが故の、露光ミスやフィルムの巻き忘れ、感光等々の撮影ミスにより、結果として不思議な写真が撮れてしまったという可能性が高い。小池壮彦氏は、明治以来の心霊写真史を概観した時に、1940年代後半～1960年代前半にかけては、心霊写真はむしろUFO写真やUMA写真といった新興の「眉唾写真」の人気の陰に隠れていたとし、その後、再びブームになった背景について、以下のように述べている。「もとをたどれば心霊写真の撮影は、基本的に霊能力があると主張する人の専売特許であった。戦前にはカメラ自体が高級品で、誰にでも扱えるものではなかったということもある。しかし一九六二年(昭和三十七年)に国産初の全自動カメラが発売され、やがてインスタントカメラが普及すると、心霊写真が日常的に撮れることがわかった。テレビや週刊誌が心霊写真の“投稿と鑑定”というシステムを確立し、単なるピンボケ写真でも心霊写真と認知してしまう風潮を広めたことで、心霊写真は“眉唾写真”の王座奪回に成功した」。小池壮彦「「眉唾写真」の魅力——霊と宇宙人」(一柳廣孝編著『心霊写真は語る』、青弓社、2004所収、247頁)。
 - 52 2007年時点で、都市部の百世帯当たりのカメラの普及率は45.06台(北京だけなら98.88台)、ビデオカメラは6.17台(北京だけなら16.4台)となっている。『中国統計年鑑』(2008年版、中国国家统计局)参照。
 - 53 URLは<http://www.lochness.co.uk/livecam/index.html>。

- 54 遠野テレビのサイト内のカップバ淵ライブカメラ。URLは<http://www.tonotv.com/html/livecamera/kappabuchi.html>（最終確認日 2009 年 8 月 4 日）。なお、同テレビでは、カップバ捕獲に 1000 万円の懸賞金をかけている。
- 55 1990 年代までの〈野人〉や〈水怪〉に関する書籍については、前掲拙稿「中国人の“野人”イメージ——目撃報告と文学作品に現われた現代の妖怪」、「長白山「天池怪獣」の形態学」等を参照。
- 56 雲南省科学技術協会の発行する月刊の科普雑誌。UFO や超能力など、オカルト的な題材を多く扱う。同誌が創刊した 1980 年は、神農架の〈野人〉騒動がピークを迎えたり、〈天池怪獣〉の最初の目撃報道があったりと、中国内で怪獣事件が賑やかだった年でもある。
- 57 雑誌『深圳風采週刊』（週 95 期、総 252 期、深圳特区報出版社、1998）では大きく表紙を飾っているほか、彼の調査活動の特集記事で紹介している。書籍では、前掲『尋找“野人”——神農架探秘紀実』がまるまる一章を設けて、彼の活動とインタビューを掲載している。雑誌『中国郷土地理』2005 年 6 月号（『西部旅遊』雑誌社）では、「神農架は〈野人〉以外に何があるのか？（原題：神農架：除了“野人”还有什么？）」と題する特集を組み、実に 30 ページにわたってオールカラーで彼の活動をレポートしている。また本文で触れた中央電視台の番組にも頻繁に登場している。1998 年 4 月に神農架を訪れた際、筆者がおこなったインタビューは前掲拙著『中国「野人」騒動記』（59-74 頁）参照。
- 58 1977 年に日本のトロール船瑞洋丸が、ニュージーランド沖で引き上げた謎の動物死骸。既に腐敗が激しく、原形をとどめていなかったが、そのクレーンに吊るされた姿が古代のプレシオサウルスに似ていたため、マスコミによってニューネッシーと名付けられた。腐敗臭が激しかったため、ヒゲ状の繊維のみを採取し、現物はすぐに投棄。ウバザメ説などが唱えられたが、最終的に正体は不明のまま。ニューネッシーの鑑定については、東京水産大学教授(当時)・安田富士郎「ニューネッシーを調べて」（『文芸春秋デラックス 恐竜 2 億年』昭和 53 年 4 月号、文芸春秋、所収、35-43 頁）に詳しい。
- 59 「怪獣」以外に、「ピラミッド」「UFO」「バミュダー・トライアングル」などがシリーズとして刊行されている。
- 60 ただし、中国内の事件であるにも関わらず、同書で想像図として添付されているものが、すでに他国の未確認動物の写真（偽物）として流通している物（たとえばプエルトリコの怪獣チュパカブラ等）の無断流用だったりするなど、挿入される図版にはややいい加減なところが見られる。
- 61 なお、同書の巻頭写真ページには、現代における想像上の怪獣像として、日本映画『モスラ』（東宝、1961）からの写真を一枚、やや唐突ながら引用している。映画の怪獣の紹介は本文中にはなく、写真も、このモスラのみである。しかし、これは著者の中で、映画の怪獣が神話伝説中の怪獣の延長線上にあることを示唆しているといえる。現代の怪獣映画における怪獣像の問題と、中国で初めて制作された怪獣ドラマについては、後述する。
- 62 神農架の〈野人〉についておそらく初めて公的に発表された論文は、華東師範大学の生物学者・劉民壯「沿着奇異の脚印——鄂西北山区“野人”考察」（『百科知識』1979 年第 2 期所収）であるが、一般向けにまとめられた書籍では、江延安、雲中瀧『“野人”尋踪記』（陝西人民出版社、1983）が最初である。また、上述のように 1981 年に中国「野人」考察研究会が結成されるが、彼らを中心として初の「野人」専門誌『“野人”探奇』が 1985 年に創刊している。
- 63 大西洋のバミュダ海域の三角地帯で、船舶や航空機が消息を絶つ事件が相次いだことから、魔の海域として名付けられた。宇宙人説や異次元への入り口説などが唱えられ、オカルト系の書籍で好んで取り上げられるが、その多くは普通海難事故である。と学会著『トンデモ超常現象 99 の真相』（洋泉社、1997）参照。
- 64 中国では、このバミュダー・トライアングルの謎を、UFO、ネッシー、雪男（〈野人〉）と合わせて「四大怪」もしくは「四大謎」というくくりで紹介することが非常に多い。早い時期の書籍としては、神農架〈野人〉調査にも直接かかわっている黄万波、袁振新ら編著の『世界四大怪』（天津科

- 学技術出版社, 1981) がある。
- 65 呉広孝ほか編『長白山天池怪獣和世界水怪之謎』(延辺人民出版社, 1996) および, その大幅な改訂版である『環球水怪之謎』(時代文芸出版社, 2001) 等。長白山の〈天池怪獣〉の事例をメインに, 世界の水棲怪獣の目撃事件を紹介している。中国内のあまり知られていない〈水怪〉の記事も多い。
- 66 後に同一内容で同一判型, しかしタイトルが若干異なる以下のような廉価版も出ている。江晃榮『UMA 不可思議神秘生物』(遠鑑文化出版, 2009)。
- 67 なお, 本文中ではこの「UMA」の中国語訳として「未確認神秘動物」を充てている。
- 68 伊藤龍平氏は, その論考の中で, 日本の「オカルト伝承」が, 1980年代ころに漫画(藤子・F・不二雄の漫画『ドラえもん』)や児童書の翻訳本を通じて間接的に台湾に伝播していった事例を検証している。その際, 同時に「UMA」という和製英語も輸出されていったようで, 日本で(主に1970年代に)出版された児童向けオカルト書籍の台湾版に, 前述のUMA概念の説明があるほか, 後発の台湾オリジナルのオカルト本でも, 「UMA」概念を紹介する中で, それが日本発のものであり, 国際的には通用しない用語である点にもキチンと触れているという。伊藤龍平「台湾のオカルト事情」(吉田司雄編著『オカルトの惑星——1980年代, もう一つの世界地図』, 青弓社, 2009, 所収)参照。また同論考には, 前掲『不可思議的生物UMA』への言及もある。
- 69 ロンドンの外科医(実際は産婦人科医)ケネス・ウィルソンが1934年に撮影したとされることから名付けられた。同写真は上述の『デイリー・メール』紙に掲載され, その後, もっとも有名なネッシー写真となったが, 1994年3月13日イギリスの『サンデー・テレグラフ』紙が, 写真を偽造したというクリスチャン・スパークリングの死の間際の告白を掲載している。
- 70 たとえば, 第一章第三節は「日本水怪伝説」と題し, 実に11ページにもわたってカップパの説明を詳細におこなっている。日本の古文書中の記述や図版を多く使用しているが, 本文とは無関係の資料——日本の学研『ムー』誌がUMAフィギュア・シリーズとして発売していた「沖縄のキジムナー」や「恐竜人」の写真——を「カップパ」の形象としてそのまま流用したり, 捏造写真の可能性が高い日本の各種オカルト本の写真を流用したりと, その内容はかなり問題が多い。
- 71 ヒーローのデザインや, 正義の組織の隊員が変身する点などは『ウルトラマン』シリーズ, 変身アイテムのベルトや, 等身大での戦闘, 敵の組織の描写, 没個性な敵戦闘員の造形などは『仮面ライダー』シリーズとの類似性が顕著である。また, 敵の怪獣を殺すのではなく, 無害化した上で保護するという解決方法は, 日本のウルトラシリーズの中でも異色作とされる『ウルトラマンコスモス』(2001–2002, 円谷プロ)の強い影響下にあると思われる。これは, 日本の『ウルトラマン』シリーズは戦闘描写が野蛮だという批判が中国内では多いことを受けて, 国産の特撮ヒーロー物では極力暴力的な解決を避けようとしたがための設定かと推察される。
- 72 ちなみに, 今や日本の子供向けの特撮やアニメには, 市販のトレーディング・カード・ゲームと連動した劇中の設定が欠かせなくなっている。『ウルトラマン』であれば, 各怪獣のデータが入ったカードで友人と対戦する「大怪獣バトル」が人気であるし, 『仮面ライダー』であれば, 「ガンバライド」と呼ばれる同様のアーケードゲームが受けている。このように, 「データ化され, 収集される怪獣」という問題については, 現在爆発的人気のビデオ・ゲーム『モンスター・ハンター』シリーズも含め, いずれ考察を加えねばならない。
- 73 前掲, 原田実『日本化け物史講座』213頁。
- 74 今年(2009年)年3月, 中国の温家宝首相が, 湖北省武漢市にあるアニメ制作会社を訪問した際, 以下のような発言をおこなったとされる。「私は時々, 孫が好きなアニメを見るが, なにかというとウルトラマンだ。孫はもっと中国のアニメ作品を見るべきだよ(原文: 我有时看我孙子喜欢看动画片, 但是动不动就是奥特曼。他应该多看中国的动画片。)」『人民網』2009年4月1日記事 <http://ip.people.com.cn/GB/139288/9061028.html>(最終確認日2009年7月11日)。原文で「なにかというと」に当たる「动不动〜」には, かなり嫌悪感が含まれ, 主に否定的な場面で使われる表現))。この発言はその後, 「中国首相がウルトラマン批判」という見出しで日本でも報道されたが, 首相の意図は

どちらかという国産アニメのクリエイターに発破をかけるものであった。

- 75 ウルトラシリーズ自体はかねてより放送されていたが、1990年代末からは過去作品が廉価なVCDソフト等で、好きな時間に好きなだけ視聴可能になったことが大きい。また、中国で2004年から放送されていた『ウルトラマンティガ』は特に人気を博し、子供たちがあまりに夢中になるので、しばしば社会問題化（ごっこ遊びで怪我、暴力的になった等々）もした。
- 76 中国内において、外国産（特に日本）のアニメが席卷している現状を憂慮し、国産アニメの振興を図るべく、政府は2004年に国産動画産業基地を各地に建設した。また、2006年9月1日からは、ゴールデンタイム（午後5～8時）に外国のアニメは一律放送禁止となった。しかし、作品を生めよ増やせよの政策は、粗製乱造の問題を招いてもいる。遠藤誉『中国動漫新人類』（日経BP社、2008）参照。